

特集 環境の考古学・歴史学の現在

松木武彦

歴史学・考古学といえば、趣味の世界に属するものであるとか、教養であるとか、一部の好事家の研究対象であるとかいうような捉え方をしている人も、少なくないかもしれない。筆者が所属する大学の文学部に入学して歴史の専攻に集ってくる学生にさえ、小説やアニメに描かれた歴史にあこがれて来たのだという人がときどきいる。しかし、歴史は、決して趣味や教養や一部の好事家の世界にとどまるものではない。

テレビのニュースや新聞で毎日のように目にする字句に「歴史認識」がある。歴史認識をめぐる日本と周辺諸国との間には根深い対立があり、日本国内でもまた、これをめぐるさまざまな意見や態度の相違がある。

歴史というと過去のことだと片付けられがちであるが、これらの対立や相違が国家や国家間の現在や未来の問題に真っ向から関わっていることは自明であり、歴史とはまさに現代と未来の問題であることを痛感せずにはいられない。歴史の扱い方一つで、国家や国民の未来は大きく変わる。現代や未来は、過去への根ざし方に規定されているのである。

一方、東日本大震災以降、多くの人の命や生活や財産を奪った自然災害についても、その未来を予測して、来たるべき次の災いをできるだけ小さなものにしたいという思いから、過去の災害やそれを解明する学問的営みが、ますます注目を集めるようになった。

実際には、1995年の阪神・淡路大震災を契機として、このような観点から災害に立ち向かう考古学や歴史学の方法が琢磨され、さ

まざまな実践がなされてきてはいたのであるが、3.11がその動きに再び社会の目を向けさせることになったのは疑いない。ここでもまた、趣味や教養にとどまらない、現代と未来の問題としての歴史の営みがある。

このように、歴史は、現実の問題として機能するがゆえに、ともすれば特定の勢力の都合に応じて捻じ曲げられたり、美化されたり、無視されたりしがちである。これに対して、過去を可能な限り客観的に復元し、よりよい現代と未来の社会のために資するように努める学問的営みが歴史の科学、すなわち歴史学である。

まず松木論文は、こうした一般論としての歴史学の役割を、地域社会で語られる歴史との対峙やすれ違いの実態を通して描こうとしたものである。

今津論文は、飢饉と疫病が頻発する不安定な古代社会が、所与のいかなる環境に適応し、またその環境に対していかなる影響を与えるのかという問題を通じて、新たな歴史学の可能性を示した。

その環境の、人間に対しての最も激しい現れといえる自然災害の実態を、考古学や古代史がいかに解明しているのか。その最前線を柳澤論文は紹介した。3.11で被災した地域を千年以上前に襲った災害の実態である。

最後に渡辺論文は、人類の歴史をはるかに古くつらぬく地球の歴史もまた現代や未来に深く長く関わっていることを、私たちに再認識させてくれる。

(まつぎ・たけひこ：岡山大学、日本考古学)